

タイトル

ぐうぞう みち
偶像に導かれし災厄の勇者
さいやく ゆうしや

作者名

さんしき
三色 もちや

原稿枚数

21枚

登場人物

リリー…勇者。魔王を倒すために一人旅をしている。

ソフィ…アイドル。回復魔法を使える食いしん坊。

ミア…アイドル。みんなから様付けで呼ばれる。コスプレ好き。

アンナ…アイドル。ティアラがトレードマークのお姫様。

ルイーサ…アイドル。まとめ役になることが多い。ネコが好き。

偶像に導かれし災厄の勇者

灰色の空の下、背の低い草が敷き詰められた平原に一本の街道が引かれていた。馬車同士がすれ違えるほどの広さだ。きっと大きな町に続いているのだろう。

今、後ろから馬車が私を追い抜いた。距離も取らず接触ギリギリを通られたので、私はよるけて道から外れて草を踏んだ。

遠ざかろうとしている馬車に視線を向ける。すると、馬を操る者が座る御者台から、ヒゲを蓄えた四十代ほどの男性が振り返り私を見ていた。その視線は謝罪などの後ろめたさから送られてくるものではなく、見下しと敵意である。

私はすぐさま視線を落とすとマントに付いたフードを目深く被った。

町は住民と商人達で活気があった。

まだ太陽は天高いが宿を探すことにする。今日は何軒回ることになるのだろうか。胸の辺りに締めつけられる感覚を覚えたが無視をした。

大通りを避けて路地裏を通り、建物の玄関に掛かっている看板をチェックして行く。そうしていると、宿屋の文字が。被ったフードをまた目深にし、戸を開いた。

素朴なロビーのカウンターで仕事をしていた五十代ほどの女性が顔を上げる。

「あら、いらっしやい。お一人？」

「はい。部屋は空いてますか？」

「空いているわよ。何日滞在予定？」

「今晚だけ泊めて頂ければ」

「はいはい、じゃあ少し待ってね」

そう言うと女性は一冊の分厚いノートを取り出して何やら書き込んでいる。なんとか今日の宿を確保できそうである。そう思い少し安心したところに、

「お嬢ちゃん、悪いんだけど顔をちゃんと見せてくれる？ 泊める人の顔は見っておかないといけないから」

女性がやや怪しむようにそう言ってきた。

瞬間、私の心臓はドキリッと跳ねる。嫌な汗も流れ、目も泳ぐ。

そんな私を見て、女性は眉間にシワを寄せてさらに疑いの眼差しを向けてくる。

……言い逃れはできそうにない。

観念した私は両手で頭に被ったフードを取り払った。

「あ、あなた……！ もしかして……！」

見る見るうちに女性の顔が青ざめていく。これまでに幾度となくされた反応に、私は逃

げ出したくなってしまうがなんとか踏み止まった。

「銀色の髪、それにその紅い瞳！　あなた、災厄の勇者ね！」

「……はい」

私が肯定すると、すぐさまノートやコップなどが私目掛けて飛んできた。避けることはせず、棒立ちのままそれらを身に受ける。

「出て行ってちょうだい！　さあ、早く！」

女性は手近にあった長い箒を手にし、私に襲い掛からんという勢いだ。

私は女性に一度頭を下げ、踵を返して宿を後にした。

二軒目の宿屋。

階段を三段上がった所にある玄関口から私は突き飛ばされ、背中から道に落ちた。

「二度と顔を見せるな疫病神！　母さん、聖水だ！　聖水を撒け！」

亭主の男性が怒鳴り声を上げて戸を乱暴に閉めた。その後にカチリと鍵が掛けられた音が鳴る。

「ぐっ……」

痛む身体をゆつくりと起こす。受身は取ったので大事はないが、額から流れる血が片方の目に入って開けることができない。先ほどの男性から投げられた木の置物が当たったためだ。

どこかで顔を洗いたいけど場所が分からない。血を流したままうろつくのも目立ってしまっているので良くない。

しかし、人目がないとは言え、ここで尻餅をついたまま途方に暮れるわけにもいかない。そう思い立ち上がろうとしたところ、

「だ、大丈夫？　怪我してるみたいだけど……」

不意に上から声を掛けられ反射的にそちらに目を向ける。

可愛い女性姿があった。大きな瞳から私を心配する眼差しが注がれている。

しまった、と私はすぐさま顔をそらしてフードを被った。

「な、なんともありません。転んでしまっただけで……」

「頭から血を流していてなんともないことないよ！　ほら、見せて」

嘘をついて誤魔化そうとしたが、顔に付いた血をすっかり見られてしまったようだ。おそるおそる、もう一度女性の方に顔を向けると、女性は地べたに座る私と視線を合わせるために膝を折ってしゃがんでいた。愛嬌のある顔の横には胸辺りまで垂らされた滑らかな髪。

「フード取るね」

「はい……」

私の了承を得ると女性は優しく両手でフードを脱がせてくれた。私の顔が再び外気に晒される。この女性にも忌み嫌われるかもしれないという不安だけがあつた。

しかし、

「おでこを切っちゃったんだね。出血の割にはひどい怪我じゃないみたいで良かったー」
心底安心したように女性が言った。まだ……、私の正体に気づいていないようだ。

「先に傷口を治すから動かないでね」

そう言うと、女性は両の手の平を私に向ける。直後、温かな淡い光が私を包み込んだ。ズキズキとしていた額の痛みだけでなく、身体中の痛みが引いていく。

「治癒魔法……」

「うん！ これでもう大丈夫。あとは血の跡を拭かないとね。ミア様、水持ってる？」

突然の出会いに驚いていたため気がついていなかったが、女性が振り返り声を掛けた先に、もう一人端正な顔立ちをした女性が立っていた。少し離れた場所から見守っていたその女性が歩み寄ってくる。

「あるよ。はい」

言葉少なにミア様と呼ばれた女性が小さな水筒を差し出した。

「ありがとー。じゃあ、拭いてあげるね」

水筒を受け取った女性はハンカチを取り出して水を染み込ませる。それを私の顔に当てて撫でるように血の跡を拭いてくれた。

「はい、綺麗になったよ！ 立てる？」

「あつ、ありがとうございます……」

女性の手を借りて立ち上がる。ニコニコと笑顔の女性の顔を真っ直ぐに見れず、うつむき加減になってしまう。

助けてもらったというのに無礼な態度を取っている私に、女性は気にした様子もなく明るく言う。

「私はソフィ。で、こっちがミア様！」

「どうも」

ソフィさんに紹介されたミアさんが、首に巻かれたチョーカーをいじりながら軽く頭を下げてくれた。口数は少ないようだけどソフィさんと同様、良い人そうだ。

「私は……、リリーです」

そんな朗らかな雰囲気当てられてしまったのか、私はいつも使っている偽名ではなく本名を口走ってしまう。さすがにまずかったか、と肝を冷やしたけどソフィさんが私の手を握り、

「素敵なお名前ね！ それにミア様が好きな銀髪！」

屈託のない笑顔で褒めてくれた。ミアさんの方を見ると、先ほどまでのクールな表情を

崩し、照れくさそうに視線を外された。

「ほらほら、もっと近くで見せてもらったら？」

「別にいいよ。リリーさんに迷惑だし」

「照れちゃってー。今日はお揃いなのに」

「今日は？」

「うん、ミア様はコスプレが好きだから。今日のテーマは、銀髪エルフ娘だって！」

「ソフィちゃん、そんな大きな声で言わなくていい」

恥じらい混じりの声でミアさんがソフィさんの口を止める。

腰まで伸びた髪も尖った耳もアクセサリーらしい。でも、とても似合っていて本物のエルフにも負けない美貌だと感じた。だが、それを口に出す勇気を私は持ち合わせていない。「ねえ、そろそろ行かないと。アンナちゃん達が待ってるよ」

「そうだった！ またルイーサに怒られちゃうー」

どうやら急ぎの用事があるようだ。それなのに私を助けてくれて感謝しかない。お返しできることがなくて申し訳ないけど、せめてこれ以上私と関わらないよう頭を下げて立ち去ろうとした。しかし、ソフィさんに呼び止められる。

「リリー、この後にか予定はある？」

「えっと、予定ですか……。宿を探して部屋で過ごそうかと……」

私が答えると、無邪気な子供のようにソフィさんが言う。

「こんな天気の良い日に引き籠もるなんてもったいないよ！ 私達と一緒にご飯食べに行こー！」

「そ、そんな！ 皆さんにご迷惑をかけることになってしまいます」

突然のお誘いに、私は胸の前で両手を振って遠慮の言葉を述べた。

何も嘘はついていない。私とこうして話しているだけでも、誰かに見られたらソフィさん達が白い目を向けられるかもしれない。久々に味わった人の温かさから離れることは名残惜しいけど、仕方のないことなのだ。

だが、負けじとソフィさんが私の手を取る。

「大丈夫！ みんなでご飯を食べたら美味しいよ。ミア様も良いでしょ？」

「もちろん良いけど。でも、無理に誘うのもリリーさんに悪いよ」

「あっ、いえ……。嫌というわけではないのですけど……」

「じゃあ、行ってーい！ 行こう！」

私がまごまごしていると、ソフィさんが握った手を引っ張って表通りの方へ歩き出した。ミアさんもその後ろをついて来る。

ここで強く拒否できないのが私の弱さ——、いや、甘えだ。

優しさをもらうほど、それが反転した時の傷は深くなるというのに。

私に優しさを与えたばかりにその人が不幸になることだってあるというのに。

それでも――、私は灰色で染まった世界の隙間から差し込んだ光に手を伸ばしてしまう。

※

フードを被らず人通りの多い道を歩いて分かったことがある。

意外と誰からも私だとバレないことだ。

誰かを待たせているというのに、ソフィさんはフラフラと雑貨のお店に吸い寄せられること数回。そこで店員さんと目が合ったが何も言われなかった。それどころか売れ筋の商品を教えてもらったりもした。いつバレるのかと冷や汗を掻いていたので、まともにセールスーツが耳に入って来なかったけど。

明るい振る舞いのソフィさんと、落ち着いた雰囲気のみアさんが一緒にいてくれたからできた体験だ。そんな二人に災厄の勇者が混じっているなんて、店員さんは思いもしなかったのだろう。

「あっ！ おーい、お待ちせー！」

ソフィさんが大きく手を振る。その先にはこじんまりとした建物の前に立つ二人の女性の姿があった。

「待たせ過ぎだよ！ どうせまた寄り道してたんでしょー」

「えへへー」

「まったく、もう」

胸に可愛いネコの形をしたバッジを付けている女性が怒っている素振りを見せるが、ソフィさんはそれを笑って受け流した。その態度を追及しないあたり、この女性も本気で怒っているわけではないようだ。

「そっちの女の子はどうしたん？」

「ソフィちゃんがまたナンパして連れてきた」

頭にティアラを乗せた方の女性が私を見て訊ねると、ミアさんがそれに答える。自覚はなかったけど、どうやら私はナンパされていたらしい。

「うへへ、上玉を捕まえてきたんだ。リリー、紹介するね。アンナとルイーサだよ」

「こんにちは、初めましてー」

「は、初めまして、リリーです」

ネコバッジを付けたルイーサさんが挨拶をしてくれたので頭を下げて返した。

「リリーって……」

すると、ティアラを乗せたアンナさんが神妙な面持ちで私の名前を口にした。

アンナさんは私のことを知っているのかと背筋が凍り、自然と後ずさってしまう。

今すぐ走り出して……、でも、ソフィさんとミアさんを騙したまま逃げることになる。それはできない。踏み止まって非難を受けよう――、

「めっちゃ美人やね！ 綺麗な銀髪やしミア様も一緒になってナンパしてきたのも頷ける！」

「ミアが銀髪にしか興味ないみたいになるから。それに、その話はさっきした」

「……えっと」

花が咲いたようなキラキラとした顔でアンナさんが興奮し、ミアさんが冷静にツツコミを入れた。

ホッと胸を撫で下ろす。どうやらここにいる四人は私のことを知らないらしい。

しかし、本当は正直に言うべきなのだ。それなのに彼女達の善意に漬け込み、のうのと輪に入ろうとしている自分に嫌悪感を持ってしまう。

「はいはい、リリーさん困っているでしょー。お店に入るよー」

「はいー」

手をパンパンと叩きルイーサさんが間に入ってくれた。みんなもそれに従うあたり、まとめ役のお姉さんという印象を受ける。

楽しそうにお店に入っていく四人から一呼吸遅れ、私も敷居を跨いだ。

店内は外観通りそう広くない。カウンターの席だけでお客さんが十人入れる程度だろうか。

私達の他にお客さんはいなかった。店奥の席に五人が並んで腰掛ける。

「おっちゃん、全部乗せ五つね！」

「あいよ！」

ソフィさんが注文すると、頭に白いタオルを巻いた店主の男性が威勢の良い声で応えた。

「ソフィさん、全部乗せて……」

「ん？ リリーはこういうお店は初めて？ ここはマニアの間で有名だからずっと来たかったんだー」

「はあ……」

何が出てくるか分からないけど、美味しいお店のようだ。カウンターの上にはお箸がたくさん入った箱や、スパイスが入っていると思われる容器が並んでいる。

一番端で物珍しげに観察していると、ルイーサさん越しにアンナさんが私に質問を投げかける。

「ねえねえ、リリーってこの町の人とちゃうよね？ どこから来たん？」

「生まれは、ここからずっと西に標高が高い山があるのですが、その麓にある小さな村です」

「そうなんやー。アンナ達は東から来たからこれから寄らせてもらうかもやね」

「あつ……、でも、すぐく遠くなので……」

嘘ではない。ただ、もうその村は存在していない、と口にすることはできなかった。

「それやのに女の子が一人でここまで大変やったんちゃう？ 魔物とか盗賊とか大丈夫やったん？」

「いや、大丈夫だったんだからここにいるんでしょーが」

心配そうに訊ねて下さったアンナさんにルイーサさんがツツコミを入れる。皆さんの穏やかな笑い声が店内に響く。私も可笑しくて小さく笑っていた。

「そう、ですね。剣の腕はそれなりにあるので。魔法も少々使えます」

「へえーすごい！ リリーって美人でカッコいいし勇者の素質十分だね！」

反対側の端に座るソフィさんの何気ない言葉に私は心臓を掴まれた。

ちらり、と厨房から店主がこちらを見た気がした。

自分は、今どんな顔をしているのだろう。少なくとも皆さんから変に見られることはなかったようで、

「うん、是非ともミア達のメンバーに入って欲しいね」

「たしかにー。リリーならめっちゃ人気者になれるよー」

ミアさんの言葉にアンナさんが同調し、他のお二人も頷いていらっしやった。

乱れかけた目の焦点を直し、私が訊ねる。

「メンバーとは……？」

「あれ？ ソフィ、私らのこと言ってなかったの？」

「そういえば言ってなかったねー」

「あーら、リリーさんダメだよー。女同士とはいえ身元も分からないこんな怪しい人について来たらー」

「す、すみません」

「怪しいとはなんだー！ ミア様は怪しいけど私は怪しくないぞ！」

ルイーサさんの言葉にソフィさんが可愛らしく怒った仕草を見せた。ミアさんは素知らぬ顔をしている。

「アンナ達はアイドルなんよ」

「そう、歌って踊って戦うアイドル！」

ついさっきまでの怒りをどこかへ飛ばし、ソフィさんが力こぶを作って見せた。

だが、私は首を傾げる。アイドルという存在は知っているけど、歌って踊るだけで戦いはしなかったはずだ。

その疑問を投げかけようとしたところ、

「全部乗せ五つ、お待たせ！」

店主が湯気の立った器をカウンター越しに渡してくれた。運ばれてきた料理に歓喜の声

が上がる。皆さんの意識がそちらに向いてしまったので、私も訊ねるのを止めて器を慎重に受け取った。

スープに玉子を始め、たくさんの具が乗っている。

ルイーサさんがお箸を取ってくださいだったので礼を述べて受け取り、横目で皆さんの様子を観察する。レンジでスープから口につける人や、隠れていた麺をお箸で掴みすする人、具の分厚いお肉から食べる人など様々だ。

「どうしたのリリースさん？ 何か嫌いなものでも入ってた？」

「い、いえ、いただきます！」

余計な心配をかせかせてしまった。誤魔化すようにレンジを手にとってスープを掬う。火傷しないようにゆっくりと少しだけ飲んでみる。

その瞬間、私は自然と目を見開いていた。美味しい。濃い味の中には旨みがたくさん詰まっていた。色んな食材からダシが取られているのだろう。

夢心地になった私の手は麺へと伸びる。お箸で数本掴み上げると湯気がさらに立ちのぼった。スープが跳ねないよう気をつけながらすする。そして、これもまた美味しい。

細めの麺だけど歯ごたえがあり、先ほど濃いと感じたスープが絡んで、より引き立たせている。これならいくらでも食べられるという錯覚に陥ってしまうほどだ。

そんな感動のさなかにいる私に、ソフィさんから声が掛かる。

「どう、リリース？ 美味しいでしょ！」

「はい、とても美味しいです！」

「この白濁したスープが、とんこつ！ って感じがしてまた良いんだよね。でもね、知ってる？ とんこつだからと言って白濁しているとは限らないんだよ！」

「そ、そうなんですネ」

残念ながら私にはスープが白濁しているか分からないけど、ちょっとした豆知識を披露してソフィさんは鼻高々となっている。他の人達は聞き飽きたとでも言いたげに、反応することなく食事を進めていた。

しかし、そんなことは関係ないと満足したソフィさんも食事に戻る。

私も視線を戻し、お箸を動かした。記憶の底にしかなかった美味しい料理と温かい雰囲気気を味わっていく。

スープをすべて飲むことはできなかったけど、具材は美味しくいただいた。お腹が満たされポカポカする。

皆さんも食べ終えたようで味の感想を言い合っている。私も少ない語彙でとても美味しかったことを皆さんに伝えた。

お腹も落ち着いてきた頃。

「それじゃあ、行こっかー」

ルイーサさんの合図で皆が席を立とうとした。しかし、それをソフィさんが待ったを掛ける。

「ちょっと待って！ まだ誰がここのお代を払うか決めてないよ！」

「えー、割り勘で良いじゃーん」

「それじゃ面白くない！ ほら、ジャンケン！」

突然の提案に皆さんが渋々といった様子でそれに従う。ソフィさん以外は無理に反論したところで不毛だと悟った顔をされている。きっとよくあることなのだろう。そんな日常に私だけが微笑ましく思っていた。

そして、私もその戦いの場に加わろうとしたのだが、

「あつ、リリーさんはええよ。お客さんみたいなもんやし、私らが払うから」

「えつ、そ、それは申し訳ないですよ！」

「良いーって。うちの者がナンパしたんだから奢るぐらいしないと。まあ、ソフィが全部払えよって思うけど」

「うるさーい！ 勝負だ勝負！」

どうしよう、お言葉に甘えて良いものなのか。

本当は私が皆さんにご馳走したいぐらいだけど……。

でも、お優しく言っただけなのに無理やり入るのも……。

などと優柔不断になっているとジャンケンが始まった。

激しい戦いが繰り広げられるかと思っただが、一発で勝負が決まったようだ。

「うがー！」

「言いだしっぺの法則やね」

「ゴチ」

グーを出したソフィさんがそのまま拳を握り締めて打ち震えている。悔しさが伝わってくるけど、その様子がツボに入ったのかルイーサさんがすごく笑っていた。

勝負の余韻を味わうことなく、三人は席を立てて入口の方へ向かう。残されたソフィさんは未だ手をグーにしたまま頭を抱えていた。

「あ、あの、ソフィさん……。私は私で支払うので——」

「ダメ！ 今こそ女を見せる時！ おっちゃん、お勘定！」

「あいよー！」

その勢いの良さに私は水を差すことができなかった。

「い、ごちそうさまです」

「良いってことよ！」

礼を述べるとソフィさんは私に向けて力強く親指を立てる。

初めてそんなことをされたので反応に困り、私もおずおずと同じように親指を立てることしかできなかった。でも、こんなに気持ちを交し合えるのはとても心地よかった。

そして、ソフィさんがお金を払い、私達も店を出る。先に出て行った三人が店先で待っていて下さった。

「さてー、どうしよっかー」

「まだ時間あるしお茶でもしてゆっくりするでええんとちゃう」

「次もソフィちゃんに払ってもらおうしね」

「ひと勝負一回だけだよ！ 次もジャンケン！」

「もうそれフラグだよねー」

ワイワイとされながら次に行かれるようだ。私はその輪から少し外れて話を聞いていた。少し不安な気持ちがあったけど、

「リリー、行こー」

「は、はい！」

名を呼ばれ誘われたことで心の中では子犬のようにはしゃいでしまう。

もっと一緒に居て良いんだ。次のお店では私も話すように――、

「おい！」

突然、歩き出そうとした私達に怒声が飛んできた。全員がそちらに目を遣ると、ひとりの男性がずんずんとそばに来る。そして私を指差し言う。

「災厄の勇者……！ 何故こんな所にいる！」

唐突な出来事に、皆さんはきよんとしている。

そんな中、私だけが、災厄の勇者である私だけが、血の気が引き顔が青ざめていた。

男性、先ほどソフィさん達と出会う前に私を突き飛ばした宿屋の亭主が、鬼のような形相で言い放つ。

「お前らもそいつの仲間か！ 早くこの町から出て行け！」

私が最も恐れていた言葉。私だけでなく皆さんにも向けられてしまった敵意。

「あっ！ リリー！」

私を呼び止める声は耳に届いていたが、それに振り返えることはできない。被ったフードを目一杯に押さえて逃げ出すことしかできなかった。

※

どれくらい経ったのだろう。ずーっと向こうに見える山脈に日が落ち始めている。

遠くへ、できるだけ遠くへと走ったつもりだったが、町から少し離れた所で足を止めた。人影は見当たらないがそれでも見つかったはいけないと街道の外れにあった身の丈ほ

どの岩の陰に腰を落とす。

抱えた膝に顔を埋める。

亭主と出くわさなければあのまま皆さんと居られたかもしれない、と思ってしまうが私には幸せ過ぎた時間だったのだ。

一時とはいえ、あんな幸せを味わえたのだから感謝こそすれど嘆く必要はない。そう言い聞かせる。何度も何度も頭の中で繰り返す。

涙が零れ落ちた。悲しいという気持ちを抑えようとしているのに、勝手にこみ上がりしゃくりあげてしまう。

もう一層のこと大声を上げてしまいたい。

ダメだ、堪える。すべて受け入れるんだ。吐き出してはいけない。これまで生きてきて幾度となくできたことじゃないか。

それなのに……、それなのに、今日の私には耐えれそうに――、

「あっ、見つけ」

身体が飛び跳ねる。聞き覚えのある声があった。

「おーい、ここにいたよー」

涙でボロボロになった顔を拭くのも忘れて顔を上げる。横に首を振ると髪の毛の長い女性が街道の方へ向かって手を振っていた。

ミアさんだ。

「ほんとー？」 「またウソじゃないのー？」 という声とともに他の三人も岩の向こうから近づいてくるのがわかった。――逃げなきゃ。

その一心で立ち上がって走り出そうとした。しかし、足が動く前に手を握られてしまい振り返る。

「逃げなくていいよ」

優しい声、優しい表情でミアさんが言った。

直感で理解する。皆さんに私の正体がバレたことを。

「リリー！ 良かったー見つかった」

「ほんま、急にすごい速さで走って行くからビックリしたんよ」

「さすが勇者だねー。身体能力の良さも素敵だよー」

姿を見せた三人はそれぞれ違うことを言っているのに、その表情は同じだ。私に騙されていたというのに、非難をしようという雰囲気は微塵もなく、ただ私の無事が分かり安心したというような。

そして、私も安心してしまったのだろう。涙を止め処もなく流し、幼い子供のように声を上げて泣いてしまった。

そんな私を皆さんは優しく寄り添って下さった。

柔らかい草の上に私達五人は輪になって腰を下ろしていた。
皆さんのおかげで気持ちも落ち着いた私は謝罪の言葉を口にする。

「すみませんでした。騙して……」

「騙す？ なにも騙されてないよ？」

何のことかわからないとばかりにソフィさんが首を傾げた。他の三人も同じような反応だ。

「私は……、災厄の勇者なんです。忌み嫌われて当然の存在なのに、それを黙っているばかりか、皆さんに大変良くしていただいて……」

罪を吐露する。皆さんが私を非難するとはもう思っていないけど、どこかでそうして欲しい気持ちもあった。これまで町の人達から浴びせられた罵声のように。それに耐えることよって、私が背負った罪がほんの少し軽くなるような気がするから。

「その災厄の勇者のことなんやけど、さっきのおじさんに詳しく聞いたんよ」

「はい……」

「リリーは魔物から狙われる。それにたくさん村や町が巻き込まれて滅びた」

「そう、です……」

生まれた時から私に宿る勇者の力。それにより私は世界中の魔物から狙われている。

幼い頃に故郷の村にやってきた魔物は村中を焼き払った。その魔物は私が倒したけど、幼い私には勇者の力に頼るしかなく、力を解放したことの影響でどのように倒したかは記憶が曖昧だ。

だが、それは一回だけではない。時には私自身が魔物を倒すために出した力で町が壊滅することもあった。

身体が成長し、剣を扱うようになると同時に勇者の力も加減できるようになる。

しかし、その時にはもう数え切れないほどの犠牲が出てしまっていた。

私の存在は人から人へ伝わり、魔物と同様、もしくはそれ以上に畏怖された。

中には親身になってくれた人もいたけど、私共々周りから罵声を浴びせられることになり、恩を返すどころか不幸にさせてしまうことがほとんどだった。
だから、本来なら人が生活している場に近づいてはならないのだ。

でも、人のそばに居たいという私の我儘があった。

恨まれても、ないがしろにされても——、私は人が好きだった。

また涙が溢れそうになる。しかし、次の間にはその涙が引っ込んだ。

「でもそれってリリーは悪くないと思うんよ」

「私もー」

「同じくー」

「右に同じ」

アンナさんの言葉に三人も同調した。私は狐につままれたような表情をしていると思う。私が悪くないなんて、そんなこと初めて言われたからだ。

「そのおじさんに、それやったらリリーに旅させないで兵士が多い町に居てもらったら良いんちゃうのって言ったんよ。そしたら、魔王を倒せるのは勇者だけだから町の人達が我慢してるって言うねん！ めっちゃ腹立ったから殴ってやったわ！」

「私もー」

「同じくー」

「右に同じ」

「え、ええっ！」

魔王を倒すことだけが私の存在意義のはずだが、皆さんは私のために怒ってくれたと言

う。どう感情を表現して良いのか戸惑っていると、ミアさんが続ける。

「リリーさん、ご飯の時にも言ったけどミア達のメンバーに入らない？ ミア達と一緒にいればリリーさんを守れると思うんだ」

「私を、守る……」

「そうしようよー。アイドルとしてじゃなくても、マネージャーとかプロデューサーでも良いよ！ でも、リリーは美人だし運動神経もあるからアイドルがオススメかなー」

そんな具体的な話を楽しげにソフィさんがしてくれる。

私が守られるなんて、そんなことは許されるのだろうか。

でも、こんなに私のことを考えてくれている人達が良いと言っている。心が激しく揺れ動いた。

「もちろん無理にとは言わないけど、私もリリーさんが入ってくれると嬉しいな。魔物の心配をしているんだったら、それは大丈夫だよー。私達は強いからねー」

「魔物や霊体をちぎっては投げしてきたからねー！」

ルイーサさんの言葉に乗っかるようにソフィさんが本当に投げるような動作をされた。

私は先ほどのお店で訊けなかった質問をする。

「歌って踊って戦うアイドルでしたっけ……。戦うって依頼を受けて魔物を倒したりするんですか？」

「うーん、お金に困った時とかはそういうこともするけど。基本は、ライブをしてファンの人達の悪い気なんかを集めるの。それを迷惑の掛からない所で具現化させて処理してるんだよ！」

「は、はあ……」

いまいちピンとこない。それを察してミアさんが補足を入れてくれる。

「まあ、ライブで楽しんでもらって、ついでにその人達に憑いている悪い運氣や病氣なんかをこの籠に集めるんだ。ファンの人達にすれば、楽しいし体調は良くなるしで一石二鳥なんだよ」

そう言って鳥かごのようなものを私に見せてくれた。材質は分からないけど魔力を感じる。

そこにアンナさんが、

「話だけやったら分からへんやろうから、リリーさんのために今からライブするよ！今日はオフやっつてんけど特別貸切で！」

その提案に周りから「おー」という声と拍手が起こる。突然のことに私がうろたえていると、

「準備！」

続いて指示を飛ばし、それに従って皆さんが立ち上がった。それぞれがライブを行うための準備を始める。

ルイーサさんは手のひらほどの大きさをしたガラス球を空中に設置されていた。不思議そうに私が眺めていたら気がつかれたようで、手にしている物について説明して下さる。

「これはねー、音を出す魔法の道具なんだよ。曲や私達の声を大きくして響かせてくれるの。これがリリーさんの方へ出力する用。これは私達が聞く用ね」

歌う人のためにもスピーカーがいるんだ、と意外に思う。そんな感想が顔に出ていたのかルイーサさんに笑われてしまった。

そして、四人が間隔を空けて横一列に並ぶ。その凜とした佇まいに、座って見ているだけの私が緊張してしまう。

「一曲目、行くよ！」

合図とともに全員が頭の上に片腕を伸ばした。そして、空間からマイクを取り出し掴む。例のガラス球から大きな音が流れ始める。アップテンポと言えば良いのだろうか。気持ちが高揚してくるような曲調だ。

歌い出して揃えられた綺麗な歌声に惹き込まれる。

一人ずつ歌うパートでは、それぞれの個性が表現されていてとても素敵だ。

歌だけでなく踊りも精錬されたもので、四人の呼吸がピッタリと合っていて見惚れてしまう。

ただ、私が見えている世界でなければ、と寂しく思う。

そして、続いて二曲目も披露してもらった私は、立ち上がり精一杯の拍手で皆さんを称えた。

「どうだったー？」

「すごく楽しめました！ 初めてライブという体験をしましたが、皆さん輝いていて…」

そこで私は言葉に詰まってしまおう。嘘偽りのない気持ちを伝えようとして。思わず顔を伏せてしまった。こんな態度を取っていたら不満があったのかと思われてしまおう。

一度息を吐いてから顔を上げた。心配そうに私を見つめている皆さんに、意を決して告げる。

「私……、色が見えないんです。すべて白黒で、空の青さも、草木の緑も知りません。先ほどのライブは心の底から感動しましたが、色があつたらもっと素晴らしいものなんだろうな、って……」

段々と伏し目がちになっけいき、言葉の最後を出す頃にはまた俯いてしまっていた。

せつかく好意でライブを観せていただいたのに、私の事情で水を差してしまい申し訳なく思う。やっぱり言うべきではなかった、と後悔していると、

「ミア様ー、籠に何か入ってる？」

「なんもない」

「ふーむ」

そんなやり取りが聞こえてきた。それから、アンナさんが私に訊ねる。

「リリー、その色が見えないのっていつから？」

「えっと……、おそらく生まれた時からです……。生まれながら勇者の私には、力とともにその呪いがあつて……」

「勇者の呪いかあ。たしかにそんな強力そうなものなら、普通のライブでは解呪できひんのも納得やな」

そう言つて、スカートのポケットから取り出した物を私に手渡して下さった。摘めるほどの大きさをした透明な石だ。

「これは『ズイ』って言つて、特別な石なんよ。アンナの故郷の月で採れた物で、呪いを封じ込めてくれるの」

「月で……？ アンナさんって月からいらしたんですか……？」

私が驚くと向こうにいるルイーサさんが、

「そう言っているだけだから気にしないで良いよー」

「うるさいな！」

アンナさんが怒り返すと、ミアさんとソフィさんが声を上げて笑った。普段から交わされているやり取りなのだろうか。私の中では色々と謎が深まるばかりだ。

「とにかく！ 次はこれを持ってライブを観て。そしたら、リリーの呪いも解けるはずだから！」

「私の呪いが……」

手にある小さな石を見つめる。本当にずっと生きてきたこの世界が変わるのだろうか。そんなことを考えていると、ミアさんが手を挙げて発言する。

「でも呪いを封印したら、リリーさんの勇者としての力も封印することにならない？」

「あつ、それは考えとらんかった」

勇者の力が無くなる……。それは私の存在意義が無くなるのと同じことだ。魔王を倒すためだけに生きている私が、それを達成することができなくなるのだから。

アンナさんの気持ちはとても嬉しいけど……。今まで犠牲になった人々にも申し訳が立たない。

そう思い、石を返そうとしたのだが、

「大丈夫！ 私達がリリーの力になれば良いんだよ！」

「それもそうだね」

「なるほど、問題なんてなかった」

ソフィさんが力強くそう提案した。ルーサさんとミアさんもそれに同意を示す。

私は呆気に取られた顔をしていただろう。

そんな私にアンナさんが笑顔を見せる。

「というわけで、アンナ達もリリーの魔王退治手伝うよ！」

「そ、そんな……！ 危険な旅に皆さんを付き合わせる訳には……」

「気にせんでええよ。アイドル活動のついでにばっばと倒すだけやから」

「でも……」

近所に買い物へ行くかのように仰るが、たくさんの困難が待ち受けているはずだ。私に与えられた使命のせいで皆さんが傷つくのは見たくない。

言いよどむ私に、アンナさんが力強く言う。

「ひとりみんなのために。みんなはひとりのために。リリーはもう大事なメンバーなんだから、みんなを頼って良いんだよ！」

いつの間にか私もメンバーに加入しようだ。だが、それに不満はない。それよりも、ひとりで抱え込まなくても良い、という心強い言葉をもらった。

不安はある。だけど、私は皆さんと居たい。

皆さんと同じ色鮮やかな世界で生きたい。

「……お願いします」

「任せて！」

親指を立て、アンナさんが三人の元に戻る。

それぞれが配置につき、広々とした平原の一角が再び緊張感に包まれた。

——曲が流れ始める。

心踊る歌声や、一糸乱れぬ踊りに目が釘付けになる。自然とズイという小さな石を胸元でぎゅつと握り締めていた。

すると、

「うっ……」

視界が眩しくなり目を閉じてしまう。皆さんの姿を見たいのに。

軽く首を振って気を取り直す。ゆつくりと、まぶたを開いた。

「――」

眩しかった。光が眩しいのではない。歌う四人の姿が眩しいのだ。

色がない世界を生きてきた私にはあの色がなんとという名前なのかなんてわからない。し

かし、そんなものは些細な問題だ。目に映る鮮やかな世界に私は感動していた。

皆さんの衣装が美しく踊っている。その後ろに見える風景も綺麗で、ライブに華を添え

ていた。

不思議な気持ちに私に涙を流させた。いつも流していた冷たいものではなく、とても温

かい。

曲が鳴り止む。

同時に先ほどのように拍手を送ったのだが、何故か皆さんが慌てた様子で駆け寄ってくる。

「リリー！ 大丈夫!?」

「えっと、泣いてますけどこれはどこか痛いとかではなく――」

「髪が黒くなっているよ！ よく見たら瞳の色も茶色っぽく……」

どうやら泣いていることに心配されているわけではないようだ。それにしても髪が黒くなっているとはどういうことだろう。

私は横髪を摘んで確認してみた。すると、灰色の世界では白に見えていた髪が黒くなっている。

「呪いは？ リリーさん、色は見えてる？」

「あつ、はい。これが正常なのかはわかりませんが、とても色鮮やかになりました」

「ということは成功したんだね。髪色とかも勇者の力が宿っている証だったのかも」

ミアさんの推察に他の三人もなるほど頷く。見た目が変わったことに実感が湧かない私は首を傾げた。

握り締めていた手を開くと、透明だったズイが黒くなっていた。おそらくこれが呪いの色なのだろう。

「それは大事に持ったとき。割れたら呪いがリリーに戻ってしまうし、封印できるのは一度だけやから、次は私らじゃどうしようもできなくなるねん」

「……はい。わかりました」

つまりは、これを割れば私は再び勇者の力を使えるようになるということだ。

もし、勇者の力がなければ勝てない強敵に出会えば、守りたい人達を救うためならば、私は……。

「すごいね！ 新しいリリーだ！ これなら町の人達もリリーって分からないよ！」

思考に意識を向けていたらソフィさんが嬉しそうに私の手を握ってくださいました。

「新しい私……」

それは、私が災厄の勇者だと認識する人はいなくなるということだ。私が皆と同じように生活をしていても忌み嫌われることがないとも言える。

本当にそれで良いのだろうか。

私を狙って襲ってきた魔物の巻き添えになった人々が許してはくれない。その罪を突然放り出すなんて……。

「大丈夫。アンナ達と旅して色んな人達を笑顔にしよう！」

私の心中を察してか、アンナさんがそう言ってくれた。

そうだ。私は皆さんと一緒に居ることを選んだのだ。姿が変わったのなら迷惑を掛けることもないはずだ。それに、アイドルの活動をして人々を笑顔にすれば償いにもなる。魔王を倒すことしか存在価値のなかった私に新しい価値が生まれた。

「——はい！ よろしくお願いします！」

深々と頭を下げると、皆さんが私を迎え入れてくれる声を掛けて下さった。

頭を上げると、私の顔を見てルイーサさんが、

「おっ、良い笑顔！ その表情を忘れちゃダメだよー」

手で口元を確認するとたしかに微笑んでいるようであった。

こんなに心穏やかな気持ちになることがあるなんて想像もしたことがない。

「さて、リリーの歓迎会を兼ねて美味しいご飯を食べに行こー！」

「もう食べるの？ さっき食べたばかりじゃん」

「何を言ってるんだい、もう日が沈むよ！ 晩ご飯の時間！」

「ほんとにソフィは食べるのばかりだねー」

「まあ、ええんとちゃう。ゆっくり色んな話したらお腹もすくやろ」

「よし、行くぞー！」

ワイワイと話し合う見守る私だけど、もう輪に加わる不安はない。先頭を意気揚々と歩くソフィさんについて行く。

ふと、思い浮かんだことを口にする。

「とても綺麗な空ですね。これが青色ですか？」

「ううん、これは茜色。夕方の空の色だよ。雲もないし明日になったら青空が見れると思う」

「そう、ですか」

私は立ち止まって沈んでいく日を見る。

こんなに美しい景色がそばにあったなんて知らなかった。
だけど、これからいくらでも見れるんだ。

「おーい、リリー」

「あつ、すみません」

ぼんやりとしてしまい声を掛けられる。少し駆け足で仲間の輪に戻った。